

女學校  
用讀本

源氏物語拔萃

末摘花

三





末摘花

は巻源の年五湖月、十七歳の春より、明る年の暮まで終りあり、とあり、玉小櫛の説は終り、十八歳の二月より、十九歳の正月まで終りあり。

段落

は巻ハ一大段五小段とあり、一小段は於てハ大捕の命ぬの系圖末摘花の系圖をあらハして、源の始て懸想志の秋を叙し、二小段は於てハ、三条の大殿のさま源氏命ぬを責て末摘花を見る、秋を叙し、三小段は於てハ、源末摘花は逢ひ

末摘花の巻

凡一大段五小段三十四節

は巻ハ源氏十八歳の春より、十九歳の春まで終りあり、とあり、歌子詞をとりて付たる之詞ハ五小段の才五節は終りあり、歌ハ五小段の才二節は終りあり、とあり、ききとるは、末摘花を神にふれ、とあり、紅の花ハ末よりさけハ、末より摘まらる、末摘花といふを、この常陸の宮乃侍むを、ハ、鼻あは、まきよ、まきよ、とあり、この巻ハ、夕鳥の巻の文脈を直よりうけたる事、さ、は、い、て、あ、は、の、前、の、と、より、因、卷、の、後、の、と、追、は、こ、し、り、な、を、さ、て、こ、を、旧、注、よ、あ、は、の、並、と、て、横、置、を、あ、ひ、たり、と、い、い、を、ね、ら、る、め、並、と、い、お、き、よ、ま、よ、ま、よ、と、二、つ、よ、を、ら、る、て、二、卷、よ、か、け、る、と、い、ふ、下、皆、さ、る、こ、と、知、る、べ、し。

あ、は、の、前、の、と、より、因、卷、の、後、の、と、追、は、こ、し、り、な、を、さ、て、こ、を、旧、注、よ、あ、は、の、並、と、て、横、置、を、あ、ひ、たり、と、い、い、を、ね、ら、る、め、並、と、い、お、き、よ、ま、よ、ま、よ、と、二、つ、よ、を、ら、る、て、二、卷、よ、か、け、る、と、い、ふ、下、皆、さ、る、こ、と、知、る、べ、し。

源氏物語

末摘花





と朱雀院行幸の由支  
度のよを叙し、四小段  
は於て八原未摘を嫌  
ひのふ状雪の夜未摘  
を訪るふよを叙し、  
五小段は於て八原未摘  
より源へは贈物を源  
よりも物を源へはを  
を叙し、結尾は源自ら  
の鼻は紅を付て、ば上  
と戯まのふよを叙せ  
れあるは、若葉卷の文  
脈をも受けて、今を  
此大段を結ぶるよ

眼目  
は物語源のよめりよ  
くして、たとへしんよ  
かきたるべとも、人よ  
をわけのふつぬの  
み心るれば、未摘よ

うちとけぬらぎりのけきり。かゝるものこれ  
はいどまきさまよ。けぢりくちり。あられ  
よ。にる物ちりこひ。おぼえぬ。冒れぬ。け  
あのさうり。とわき知。たすか。夕白の卷の文脈をうけ  
たよめて。この巻よ照るま。文法。〇。別。ど。れ。あ。あ。ば  
ま。源。ハ。思。入。ナ。レ。ド。モ。ヤ。ハ。リ。飽。ス。ア。リ。シ。ト。ハ。〇。お。お  
くれ。引。き。え。花。鳥。は。信。明。集。時。分。は。指。の。う。つ。と。も。お。お  
くれ。秋。ハ。忘。れ。ト。ハ。と。ま。さ。れ。引。き。え。る。と。ハ。夕。白。の。夕。白  
。あ。られ。た。る。を。い。う。〇。年月。あ。れ。た。夕。白。の。う。せ。の。入。ハ。去。年。を。れ  
ど。年月。を。い。う。〇。年月。あ。れ。た。夕。白。の。う。せ。の。入。ハ。去。年。を。れ  
ま。う。ら。〇。引。き。え。と。け。ぬ。ら。ぎ。り。れ。れ。ま。き。げ。り。打。解。ぬ。ほ。の。や。う  
ま。が。ふ。ん。ゆ。〇。内。の。ま。さ。は。俗。ハ。リ。ア。ヒ。タ。サ。ニ。〇。け  
ち。う。く。ち。り。〇。あ。られ。は。親。く。馴。付。て。あ。う。夕  
白。の。ゆ。の。あ。られ。る。ま。〇。は。る。物。ち。り。こ。ひ。お。ぼ。え。ぬ  
ふ。似。る。者。ち。り。こ。ひ。も。慕。ひ。お。ぼ。え。ぬ。源。の。心。を。叙。せ。る。よ  
源。の。心。カ。ハ。エ。ラ。シ。シ。デ  
い。の。さ。う。り。ま。さ。は。俗。ハ。リ。ア。ヒ。タ。サ。ニ。〇。け

十六号十二

のめきよ却て捨るハ  
ぬ。さそ。未摘ハ今ハ  
孤とさるてゐのふ  
あま。父老の左世のか  
げもをく表る。秋  
を眼目としてかゝり  
たり。そのハ。一。小。段。の。身。二  
草。よ。ハ。人。の。心。の。ま。さ  
同。才。四。草。よ。ハ。い。と。う。何  
れ。こ。う。り。て。同。才。八。草  
よ。い。の。い。の。た。い。ま。こ  
一。を。れ。め。り。た。い。二  
小。段。の。才。六。草。よ。ハ。い  
よ。た。る。あ。う。り。と。三  
小。段。の。才。一。草。よ。ハ。い  
た。る。あ。う。り。と。四。小。段。の。才  
七。草。よ。ハ。い。の。い。の。た  
め。い。の。い。の。た。い。ま。こ  
一。草。よ。ハ。い。の。い。の。た  
た。く。さ。う。り。た。る

んんのつ。ま。き。と。な。ん。ん。ん。ん。ん。ん。  
り。い。あ。は。お。ぼ。え。ぬ。ら。ぎ。り。れ。れ。ま。き。げ。り。打。解。ぬ。ほ。の。や。う  
ゆ。う。ち。り。〇。引。き。え。と。け。ぬ。ら。ぎ。り。れ。れ。ま。き。げ。り。打。解。ぬ。ほ。の。や。う  
ま。が。ふ。ん。ゆ。〇。内。の。ま。さ。は。俗。ハ。リ。ア。ヒ。タ。サ。ニ。〇。け  
ち。う。く。ち。り。〇。あ。られ。は。親。く。馴。付。て。あ。う。夕  
白。の。ゆ。の。あ。られ。る。ま。〇。は。る。物。ち。り。こ。ひ。お。ぼ。え。ぬ  
ふ。似。る。者。ち。り。こ。ひ。も。慕。ひ。お。ぼ。え。ぬ。源。の。心。を。叙。せ。る。よ  
源。の。心。カ。ハ。エ。ラ。シ。シ。デ  
い。の。さ。う。り。ま。さ。は。俗。ハ。リ。ア。ヒ。タ。サ。ニ。〇。け

源氏物語

未摘をれ















と志けるし先づのハ  
 一く忍多きと○あ  
 ぞんは末摘の寝殿  
 一ノ才四節  
 内とのぬきと常より  
 も琴の音はまじりぬ  
 べき衣のけきよ僅  
 されてあつよあり  
 一と○ハあひあ  
 一きよとんいそびし  
 き内祝のほまの出入  
 又隙さくして○き  
 志る人こそ「琴を  
 人の必あらうと○  
 あいさう」俗無き意  
 一○むねつふる命ぬ  
 一よ先あゆめ○  
 一あまのり三と源末  
 摘の琴を夢のひて心  
 よ思ふよ弾しゆ手

たれをまごかろ格子モサ、デもされがら。梅ののをそのしき  
 見いごしそもの一のふ一小段の才三節。源末摘の  
 命ぬ命ぬをりあれと思ひて命ぬは命ぬの音のよまさり侍  
 らん。と思ひつへらほ、衣のけきよひよさをれを  
 づりてらん。あはあ、しきりぞ入よえうけしきま  
 らぬこそくちを残念しけれ。とり末摘ばきくあま人をあられ  
 も、しきよりうみ人のまきくをのりやいとせめ  
 よきもゆ。あいなういひのびあをせん。とむねつふる。  
末摘琴を海オモシロクのうよのきさるらオモシロクいふをうオモシロクうまゆ。なよバ  
 のりふのきてならひほど。ものぬららのまぢ

十七号一

いふのまこといさけれ  
 ども傳授の筋をよま  
 ると○あれしり  
 て末摘の住居の  
 さゆ之眼目○いあ  
 よ思ふのこをさし  
 どのやうよれあのけ  
 けあよゆんを残しな  
 ひ一とであらん源  
 の思ひ○昔物後ま  
 どのも旧注よりつほ  
 の俊蔭を引いていど  
 けあいたいふまき物  
 後とんてあふ○  
 やまひあま「俗  
 合せのふん、  
 一ノ才五節  
 命ぬハまつ琴一手よ  
 てあのせやてあま

とるもれれられた。すよくもおぼされぬ。いと心  
 ううあれしりてまびきあよささるりの人  
のまを思ふふんれふもあうう。とさるせくうづきま急たり  
 けんオトモナク名跡さくいのよおほは源ののこまことさるら  
 ん。のやうのあよこそ。昔物語よもあをれなるほど  
 もありけれ。など思ひつづけ。ものやりひよら  
 ます。とおぼせどうちつけよ末摘のおほまんとんこ  
 づりくして。やまらひあま一小段の才四節  
 て。物の音を源よオ女とん命ぬ命ぬなまうり  
 のせまるる状なり。命ぬ命ぬうどあるものよそ  
 いたうみくさるさせなら。と思ひられ命ぬをくもり

源氏物語

末摘をれ

六



幾手も係はすせせしつ  
らどと用立てせしつ  
○すしうどのまじ命  
ぬ琴をやめさせま  
つらんとしてせしつ  
そのよをいひ又来客  
の約束ありするといふ  
○さあめくさるる  
よて「源ハ中途半ぱ  
てやこもれが歎息  
のふこ○おのつとぞ  
たり源よりもす  
己けのつゆどまづ今  
夜のやうきをとおか  
ろーと思せしん  
一少ノ才七節  
心よくしてとぞへび  
奥ゆり〜〜〜とぞ  
づん○りぞや「イヤ  
モウん○り〜ろめた

がちよ侍るめり。まらうどのこんと侍りつる。琴を  
ひがほしよも一匹。今のどのよをこわう〜うけのらんをあり  
なん。とそいしうもそくせのきでうりたれば。ちあ  
なるなる福よてもやぬよのな。ものゆ〜く福  
よもあ〜で。ぬ〜うとのめよ。気をもを〜とお  
ぼきたり。『一少段の才五節。命ぬんき〜て源よ  
おれ〜く〜いけち。あきほどのけをひ。たちき〜せき  
せよ。とのめんと。ころろ〜とぞへび。命ぬん  
のよのなる。あ様よ。おひよ〜て。ころろ〜  
げよ。ゆの〜〜〜め。げ〜〜〜め。き〜〜はよ  
スマヒ

十七号二

まを係よや「立すの  
が却て案〜られたま  
まんと命ぬ。源よ  
よも〜○げよ〜も  
ある。源命ぬの相  
をさ〜と〜のゆのふ  
え○おれんも〜し  
あハ源〜ん。未摘  
未摘のあの内娘をれ  
ば。お〜たちての〜が  
ハ然るべ〜びと源  
の思〜る〜  
一少ノ才七節  
引へのまめ〜帝  
ハ源をあまり実法  
よあ〜と〜め  
何〜と〜を〜うを  
ん〜を〜り〜侍  
ま〜○〜人のい  
んやうよ〜他人の

や。とり〜。げよ。もあ〜と。係よ。あも人〜うちと  
けて。の〜ら〜ぶ〜き。人のま〜は〜。き〜と〜とあれ。な  
ど表よ。おほ〜。人のほ〜とされ。げ〜やう  
のけ〜。き〜ほのめ。せ。と。あ〜ひの〜。契  
約束や。らん〜  
の〜。こ〜。や。あ〜ん。いと。志のびて。う〜の〜。『一少  
才六節。源琴の考をゆ〜。命ぬ源〜  
未摘花を。え〜。や。と。おほ〜。う〜の。ま〜。あ〜。お〜  
ま。と。も〜。あ〜。や。と。おほ〜。さ。せ。孫。ふ。こ。を。う〜  
思ひぬ。〜ら〜。を。り〜。侍れ。あ〜。や。う。の。や。つ。れ。姿  
を。い。あ。で。あ。は。ら。ん。ど。は。ら。ん。と。き。こ。ゆ。れ。ば。た。ち  
あ〜。り。う。ち。こ。ら。ひ。て。と。人。の。い。え。ん。や。う。よ。と。あ  
源の  
答へ

源氏物語

未摘をれ

七







ハ源をさへん、さハ  
諸共よ林の中ハ出カ  
のそ源ハ時家よ入り  
のふとをかくし、の  
るよと恨むえ〇人の  
思ひよしぬよとよと  
あひよらぬ中おの  
志ざはよと源のま  
む〇〇〇〇〇〇〇〇  
のあ上のいさよひの  
月とあをさうけて源  
自らを月よよせそ云  
ん、さハ月ハ里つら  
お一なるて照らせ皆  
人め休べけれどその入  
方までをさゆく人ハ  
さまよのそと〇〇〇  
以志ん〇〇〇〇〇〇〇  
うのハありまおれど  
き際身さくつていハ

このまのよよ。あともりてふり持させ給ふつら  
さよ。ハおくるつあふまつりつら。  
おろともよ大うち山いぞつれどいさあこみ  
せぬいさよひの月。とうらむよぬこきれど。  
けまとんのおよよ。源。さま。うなりぬ人の  
思ひよらぬとよとよくむ。  
さよとこのぬらげをばくれどゆへ月のら。  
ハのやまげたぬあつげぬ。中福。あつひありあ  
だ。いのよさきせ給らん。とやまのふま。このや  
うのハありまよ。さ。い。志ん。が。う。そ。を。あ。げ。

十七号四

「あらん、結き、結き、  
よハ物のそ尾よまこと  
も結よまことハ中福  
きて、結きよまことハ  
あり。一。を。こ。い。ふ。え。〇  
お。く。ら。せ。の。う。で。こ。を。〇  
後。無。仕。ま。ま。を。後。ま  
させのらばあふん。〇  
列のなて。一。こ。ハ。夕。鳥  
の。こ。ハ。源。の。や。う。ま。え  
つけらる。やう。る。れ  
ど。の。夕。鳥。の。こ。ハ。中  
お。い。え。あ。ら。ぬ。と。え。〇  
お。か。き。こ。う。は。重。き  
功。ハ。源。ハ。よ。の。夕。鳥  
の。こ。の。中。福。ハ。知。ら。れ  
ぬ。を。い。つ。く。手。が。ら。よ  
お。ほ。ま。さ。〇。お。の。く。  
ま。え。て。ま。し。源。ハ。中。福

志まこともあまげけれ。おくらさせ給うてこそあら  
め。やつれたるほありきは。あふん。一。ま。こ。も。あ。ま。き  
なん。と。お。あ。一。い。さ。あ。そ。ま。つ。か。う。の。こ  
みつけらる。を。ね。こ。と。お。ほ。せ。ど。の。な。ま。で。  
こちえさづぬ志しぬ。おれまこころは。こころのう  
ちよおぼ。い。づ。お。の。く。契。れる。あ。こ。よ。も。あ。ま。え。て  
ゆきこられ給を。び。と。車。よ。の。り。て。月。の。を。あ  
い。ま。ほ。い。ど。よ。を。さ。づ。れ。た。る。道。の。程。ふ。え。ふ。き。あ。そ  
せて大。お。よ。お。を。一。ぬ。一小段の才ハ節ハ。源。再。度。末  
お。よ。ま。さ。の。一。ハ。状。ハ。是。と。を。一。小。段。と。ハ。は。あ。よ。月。の。を。さ。づ。  
き。福。よ。と。あ。ら。上。の。才。二。節。よ。こ。の。改。の。御。月。夜。ハ。才。三。節。よ

源氏物語

末摘をれ

九



も外よりよ方あれど  
その女の方へあまえ  
て行つたが、同様に  
て大層な調りのあふ  
二小才一節  
周る厚くめで直衣  
を穿て着て涼の着の  
へさるゝ〇つれさう  
今内裡よりきこゆる  
さよよと〇こまの笛  
拍笛へ和名集は箏石  
江除吹處而六孔之笛  
也とあり〇引さしとび  
もひけと中務の夫  
日ごとと斗は琵琶ハ引  
けど〇引の夫と引  
中務の中務よのりけ  
のあをもて離れて中  
務ハ涼よんをとむる

いとよひの月をきき福よ。は八節の上よみげよつき  
てふあちのくれのくび。きどいふは思慮する文法なり。  
ほまひのひてん  
さきさるどもおもせ娘もび思ひていりて。人足ぬ廊  
よはち厚くめでさきのへ娘ふつれさういよるやう  
よて内笛どもふきさきさびておもをれおしとび思  
のまてとびとび。娘もでこまの笛とり出のりいと  
上もよおもをれをいとおも。ろろふきさのふほこと  
めしてうちよゆこのあこよるゆる人ごよひあ  
せのよ中務のきとびとびとびとびひけど。引の夫  
ろろあけとを。もてをれもそ。たごこのたぬ  
さのるほけ。きあのたつこのまきをばえそむき  
中務のひよあ

十七号五

と〇引のつららかに  
れるくて。涼よるひ  
きとびのあひれ  
〇引さしとび  
中務琵琶よんまよ  
びとびとび〇あえそ  
きらぬまよ中務かく  
てはげぬよあるも不  
女さるれど涼を一向  
又さるらぬよあらん  
いん厚そととと  
二小才一節  
表けるりつ。末摘の  
信房のさきと〇あら  
まよとととととととと  
さきとととととととと  
ていよととととととと  
くはよととととととと  
を足そめてんよ入  
りあらば、せよもそ

いとえぬよ。おのづからかくれるくて。大妻あまどめ  
よあ。あらびおぼ。なるたれを物おもを。く  
つツガウナ  
たり。あえそ。又さるらぬよあけをるれるん。さき  
およん厚そくおもひととれたり。二小段の才一節  
の悲ひ。あまの娘。中務。源と引中務  
の女房のことを叙せり。又あちハありつる。琴の音を  
おぼ。あそ。表げなりつる。さきよひのさあるども。  
やうあそ。をさう。うおひつげ。あらま。とよい  
とをさう。うらうあまき人の。さそ。あ。月をあさ  
ぬあ。らんとき。んそめてい。う。うんご。し

源氏物語

末摘をいれ

十



孫がうほほとくもやれ  
きんと申ねんよ思ふ  
え○まゝまゝさすては  
ぐひひてんや俗  
マサカニ原のたぐい  
ありまゝのふまゝい  
申ねんよ一様  
くもくもく思ふ○  
いづれがく思ふか  
申ねんよ○おぼろ  
のさすては思ふか  
え○まゝまゝさすては  
ひまゝの人の思ふ  
る位居まゝの人の思  
ぬの思ひたりたるけ  
しまゝに思ふ本の花  
よつけて思ふいひあ  
してこそ思ふせお  
えらゝ思ふれとん○  
おの思ひたりたるけ

ふ。人よもゆてさうさうさうのりや。こがんもさ浦  
あーうん。さうさう申ねん思ひたり。この夫のあ  
うけさきさきありき孫かまをまゝまゝさすては  
ぐひひてんや。とさすねんうあやうよりけ  
に。おの思ひたりたるけ。このさうさうのりや。こがんもさ浦  
ふづ。いづれがく思ふか。返事の色は。おぼろのさく  
やま。まゝまゝさすては。あまの思ひたりたるけ。さうさ  
るさきさきひまゝの人の思ひたりたるけ。さき  
もあまの思ひたりたるけ。さうさうのりや。こがんもさ浦  
る。さうさうのりや。こがんもさ浦

十七号六

おの思ひたりたるけ  
埋まて思ふを思ふ  
やうさういあーと思  
ふとん○おぼろのさ  
まゝに申ねんよ  
んせの思ひたりたるけ  
二小の才三節  
おの思ひたりたるけ  
あまの思ひたりたるけ  
りは思ふありつやと  
申ねんよ○おぼろの  
よまゝに思ふ本の花  
おの思ひたりたるけ  
と思ひて笑ふとん○  
いさゝんとかまゝに思  
ハ思ふとかまゝに思  
よまゝに思ふとん○  
ん○人よもゆては  
孫の思ひたりたるけ

んこそ。表なまげけれ。おの思ひたりたるけ。さうさ  
りうもれあらんハ。ふづきさくくさうさうびたり。と申  
ねんよ。いづれがく思ふか。返事の色は。おぼろのさく  
例の思ひたりたるけ。このさうさうのりや。こがんもさ浦  
孫かまをまゝまゝさすては。あまの思ひたりたるけ。さうさ  
いさゝんとかまゝに思ハ思ふとかまゝに思よまゝに思ふとん○  
とさすねんうあやうよりけに。おの思ひたりたるけ。このさう  
さうのりや。こがんもさ浦  
ふづ。いづれがく思ふか。返事の色は。おぼろのさく  
やま。まゝまゝさすては。あまの思ひたりたるけ。さうさ  
るさきさきひまゝの人の思ひたりたるけ。さき  
もあまの思ひたりたるけ。さうさうのりや。こがんもさ浦  
る。さうさうのりや。こがんもさ浦

源氏物語

末稿をれ

十一



















まづ〇〇のどろろ  
て物どろろをば  
面あれと申す〇〇いと  
うびくげと甚どあ  
らあーげとん

三小ノ才二節

のどろろちまきくうんち  
まきんとつとん貴人  
のどろ〇〇あやのあり  
のひうーちとまき  
あやの芝居よなるあ  
ひだそん〇〇のわたり  
んぼそまき然るまきん  
よあひ列るんそ  
よあひげれとたあ  
らまきと一才の才二  
節、三小の才一節よん  
ぼそまきとある怒るえ  
〇〇まきとよ人のいふと  
はまきサウハイフモノ

ノヤハリ人の云々を  
強て辞退せぬん  
〇〇いらくハツとて  
返るるとせでたい  
とるちのこーよ  
あんと〇〇のこ  
ハツと路を筆貫子など  
よ置く不都をなら  
んと〇〇志とぬ  
禱をぬる源のほ座  
を殺く〇〇いと  
つまーげと上の  
小段才一節、二小段  
才一節、及び下の才五  
節よほ座〇〇みや  
うこそいやうその  
とまらんと志とん  
三小ノ才三節  
さうーは曹司之局の  
と〇〇外まじひ

源氏物語

ものどろーと。つとぬらん。とまきとめせ。と  
をい<sup>未描</sup>とらうーと。思ひて<sup>未描</sup>人よのつとぬらんやうも志  
らぬを。とそ<sup>奥</sup>お<sup>方</sup>まきま<sup>方</sup>ぬざりりりのよま。い  
とうびく志げなり。三小段の才一節。命ぬ未描  
うちまらひて。いとつとぬらん。おらーまきとを  
んぐー<sup>キンドクナレ</sup>けれ。あまきりたまきん。あやのありあ  
ひうまろみつとぬらん。そのびのよま。と  
りたれあ<sup>カホドニ</sup>ありんぼそまき。あま<sup>ヤハリ</sup>積よなるほよを  
つま<sup>未描</sup>せび<sup>未描</sup>おぼ<sup>未描</sup>ー<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>か<sup>未描</sup>る<sup>未描</sup>ハ<sup>未描</sup>ほ<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>さ<sup>未描</sup>う<sup>未描</sup>こ<sup>未描</sup>そ<sup>未描</sup>と<sup>未描</sup>を<sup>未描</sup>  
く<sup>未描</sup>つ<sup>未描</sup>申<sup>未描</sup>さ<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>あ<sup>未描</sup>よ<sup>未描</sup>人<sup>未描</sup>の<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>ふ<sup>未描</sup>と<sup>未描</sup>は<sup>未描</sup>つ<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>う<sup>未描</sup>も<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>ち<sup>未描</sup>び<sup>未描</sup>ぬ

ほんよて<sup>未描</sup>いら<sup>未描</sup>つ<sup>未描</sup>と<sup>未描</sup>で<sup>未描</sup>た<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>け<sup>未描</sup>と<sup>未描</sup>あら<sup>未描</sup>が<sup>未描</sup>か<sup>未描</sup>う<sup>未描</sup>ー<sup>未描</sup>  
ま<sup>未描</sup>ど<sup>未描</sup>さ<sup>未描</sup>ー<sup>未描</sup>て<sup>未描</sup>を<sup>未描</sup>あり<sup>未描</sup>なん<sup>未描</sup>との<sup>未描</sup>の<sup>未描</sup>よ<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>の<sup>未描</sup>こ<sup>未描</sup>ろ<sup>未描</sup>び<sup>未描</sup>ん  
ち<sup>未描</sup>う<sup>未描</sup>け<sup>未描</sup>り<sup>未描</sup>ち<sup>未描</sup>ん<sup>未描</sup>お<sup>未描</sup>ー<sup>未描</sup>た<sup>未描</sup>ち<sup>未描</sup>て<sup>未描</sup>あ<sup>未描</sup>む<sup>未描</sup>く<sup>未描</sup>志<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>ほ<sup>未描</sup>あ<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>ひ<sup>未描</sup>ま  
ど<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>よ<sup>未描</sup>も<sup>未描</sup>ど<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>と<sup>未描</sup>よ<sup>未描</sup>く<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>ひ<sup>未描</sup>る<sup>未描</sup>て<sup>未描</sup>ふ<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>の<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>な<sup>未描</sup>る<sup>未描</sup>際<sup>未描</sup>  
ま<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>ど<sup>未描</sup>の<sup>未描</sup>ら<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>と<sup>未描</sup>つ<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>く<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>て<sup>未描</sup>ほ<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>と<sup>未描</sup>ひ<sup>未描</sup>う<sup>未描</sup>ち<sup>未描</sup>お<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>き<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>  
つ<sup>未描</sup>く<sup>未描</sup>ろ<sup>未描</sup>ふ<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>と<sup>未描</sup>つ<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>ー<sup>未描</sup>げ<sup>未描</sup>よ<sup>未描</sup>お<sup>未描</sup>ぼ<sup>未描</sup>ー<sup>未描</sup>た<sup>未描</sup>れ<sup>未描</sup>ど<sup>未描</sup>か<sup>未描</sup>う<sup>未描</sup>や<sup>未描</sup>う  
の人よ。ものいふらん。なんちまき。あまも志り。あまざ  
りけれど。命ぬのやういあを。あやうこそいと。おまひ  
て物<sup>未描</sup>の<sup>未描</sup>よ<sup>未描</sup>。三小段の才二節。命ぬ源のほ座を殺  
めのと<sup>未描</sup>あ<sup>未描</sup>り<sup>未描</sup>お<sup>未描</sup>ん<sup>未描</sup>人<sup>未描</sup>なる<sup>未描</sup>ど<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>ざ<sup>未描</sup>う<sup>未描</sup>ー<sup>未描</sup>よ<sup>未描</sup>い<sup>未描</sup>り<sup>未描</sup>ま<sup>未描</sup>て<sup>未描</sup>

未描まれ







衆なるをこのまゝ  
てのうらまは買てふハ  
口をきいたであらう  
物いふるのれとそま  
たのいそぬをれと  
てとん○なれとそま  
く○しりあへ細流  
別るびハおのりばと  
ハいひたそとそま  
の申のたそとそま  
ととみたそまはま  
かけるといふ序ん  
ハたそまひよ思ひを  
かけーが苦ーま  
○みぬつそその途佛  
法よあそまの鐘と  
ありさハ鐘つきて  
ぢめんといふさそま  
ならびをへならん  
うまそまは半

のこさや。とうちをげまのよ。  
いそとびまこがまけぬらん  
いひそといそぬのよ。おひもはま  
たす。まきことのめふ女  
侍徒。気バヤナル  
おひうとそいとそま  
カシク オキノドクニ  
おひかそらいつーと  
侍後  
みぬつそとぢめん  
まうそぞめハあや  
まよおひりあそらぬ  
ゆさるせを  
十七号十三

かハつけぬさく恥  
まなをこ○いそぬ  
をものさそハもの  
えぬを却ていよま  
あそまはあれと  
いそぬハ  
そとん○なれとそま  
源のれこれとを  
まやうままあや  
よもれめと女の返  
まをけれがひるし  
とん○いそぬ  
まにま揃ハのやう  
ありてめやうま  
がひて他よ思ふ人の  
ありてあまは返  
をまそまやと源の  
審よ思ひのそま  
三小段五節

めづら。まよハ  
いそぬをさ  
めたそらあり  
しなれ。まよ  
れあひる。いと  
もの。のふ人よ  
て。入。まひま  
命婦あそらそ。た  
らむ。が目よ。ま  
ま。せよ。ま  
モマタ  
未揃をれ  
十八



















づは筋のあまの...  
 人よと...  
 やう...  
 捕のつら...  
 とり...  
 年...  
 ちと命ぬ...  
 四ノ才一節  
 みのむ...  
 り...  
 取...  
 物恥...  
 面...  
 ら...  
 ら...  
 る...  
 の...

年齢  
 といひや。思ひや...  
 モットモ  
 といひ...  
 三小段の才八節...  
 大敷へ...  
 試樂...  
 源の末...  
 あり...  
 く...  
 さり...  
 一お...  
 もの...  
 ゆく...

て能く...  
 り...  
 ○...  
 手...  
 心...  
 ぬ...  
 の...  
 ○...  
 几帳...  
 ○...  
 どの...  
 あ...  
 う...  
 ぐ...  
 刺...  
 ひ...  
 碗...  
 ふ...  
 の...  
 種子...

さ...  
 よ...  
 人...  
 り...  
 ち...  
 れ...  
 る...























ぬりぞちきとあり  
 うと末のねしを思ひ  
 出つるよきまへ○い  
 とふうくらびと出大  
 みあひまらふ人かみ  
 れと末緒の云ひひな  
 まをさげまのふと  
 四小ノ才五第

あたる福よあひあらせん人かみれとつる福ふ  
 四小段の才五第之。末緒の方れ保のまへは車りづべきこととを  
 あれたる庭前の音系を叙せり。鍵まごあけざりけれを。あがのあつうりたづひあた  
 ればおき翁甚老タルのいとふ根きそ出またる。むひあもや  
 したる。おほきまの女のもねいひまよあひてま  
 けまごひ貧困のまへとあもるまをひあうそあ  
 やしき物よ火をたぐほのうよりれて。袖ぐ包くうよ  
 ちう。おきれあどをえあエウあやらねば娘が依りひ  
 きまをく。うとあもるれなり保出借人はまのくよりて  
 ぞあけつる。

よきまへ○おがよける  
 のまあまの袖の麻よ  
 羽をうけていふとま  
 いちの羽をれをうり  
 よけるのちのちのち  
 いひては翁の神神  
 もをさる人の行ぬ  
 れま○  
 ままのいふ細様よ  
 泰中吟を引い  
 いまの才二  
 昔は風ふきあれてお  
 けとあやらまをよけ  
 るをいふつる人  
 むる。いとひて、此  
 ぶよまのまのハ云  
 こしとあまの泰中吟よ  
 夜深煙火盡霰雪白紛  
 々幼者形不藏老者躰  
 無温悲端与寒氣併入

保  
 らあまの神をれ。まのまのいふあまかくれを。  
 とお誦まのひしてまのまのまよあていとま○  
 いま保つ。はま保あげ。おまひりぞられてほ  
 ちま保れ。おま保あよそれまをくらん時。いあ  
 るまをまタトく。つね中おのようあひひくればい  
 ままのけられま。とま保あまらぶ。おあひひまて  
 なるほまの。ま保まらぶ。おあひひまて  
 てもやまぬ保ま。ま保まらぶ。おあひひまて  
 りれま保まらぶ。ま保まらぶ。おあひひまて















とて○これるおの、直  
 ひとをれ、一八と、同  
 ド、く、ひ、腐ら、は、え  
 ま、紅の、ひ、を、れ、衣  
 を、も、う、ひ、し、と、一、向  
 ま、う、ち、一、と、名、を、た  
 て、る、お、ら、よ、あ、る、べ、し  
 と、い、命、婦、の、末、指、の、か  
 う、う、と、い、て、ま、い、○、あ  
 ひ、ち、で、一、奥、の、ま、ま、い、ぬ  
 ん、の、先、つ、ま、い、り、あ、と、  
 ま、て、平、凡、の、と、い、○、人  
 の、何、ど、ま、い、末、指、の、か  
 ら、を、受、け、し、て、ま、い、の、ど、く  
 と、い、命、婦、の、か、よ、付、て  
 源、遠、さ、か、し、の、ふ、と、○、と  
 り、か、く、ま、い、や、源、遠、物  
 を、あ、は、せ、し、と、思、ひ、て  
 人、は、み、ら、れ、し、と、い、○  
 さ、き、く、あ、り、ぬ、そ、う、く

命婦  
 くれちおのひとをれざらうかきくとみひす  
 らくくひたををいしあそびいふ命婦の迷惑してまき  
 といさうなれてむらうこころをよまひあはぬど  
 かうやうのうぬをぞよまひあはらまゝあぞと  
 ろくあはくちをい人の何れあふまきまよ名  
 けくちなんのさきをがなり人々あれむとらあ  
 くまんやあはるこころい人のまき指もあはんと  
 うちうめまのふたすくはらんぞせつらんか  
 さくこころなきやうよといとたうらうとやを  
 らぬぬ  
五小段の才二節へ末指より西裝束より命婦はてはせられしを源あまされて人のみ娘

十八号十三

命婦を退かせしん  
 五小才三節  
 だんをん正大盤あ  
 清凉殿あり○い  
 やこやといやはおれ  
 トこれよと人を呼と  
 え○あいらめのお心風  
 候あまたいらめのお心  
 のと云うたぐらめい  
 華ハ赤ハ赤まねはけ  
 不いお梅をいあ○  
 みあまの山のよとて  
 三笠山春日明神ハお  
 陸より出るひ一神れ  
 一、若、陸、女、の、末、指、と、い  
 う、し、と、い、て、鼻、赤、ま  
 を、お、梅、の、と、い、と、い、ふ  
 さ、き、あ、は、せ、し、と、い、ふ  
 ○、つ、い、あ、り、し、と、い、ふ、口  
 つ、い、あ、ら、し、と、い、ふ、口

禁中 命婦の  
 まの目うよまはらへをだんをんあよまのぞ  
源の  
 まのひてくらやあはるのうらとあやしくんをみま  
コ、ロ、ツ、ケ  
 くまもくとしてなげのうら女房達何事あらんと  
ふ、か、く、ま、い  
 ゆうあはるあいらめの花の色れどみあまの山の  
 をとめとがきそくとうこひをさびて出のひぬる哉  
ヤ、ハ、リ  
 命婦いいとをのうとあふこころあはぬ人ぞを  
甚、笑、く  
 なぞは獨あまをとおがめあへりあはらびさき  
命、婦、の  
 おおの娘よこのぬりこのあはる花の色あひやみ色  
あ、ひ、の、方、で、ま、て、赤、ま、を、の、い、ぬ、く、と、い、ふ、ま、い、あ、は  
 つらんあつありうらこのいとをき一はとい人をあれ  
女、房、達、の  
 ちなるはとあれこのあまはまほをなまぬあこのあ  
あ、ひ、た、く、と、い、ふ

源氏物語

末指をれ

三十三























状之〇がらるくくの  
を急ぐまは末摘  
るじのり末摘の  
なることあらんと地よ  
り評する詞を以  
て結ぶるん

くろくいとんとくの下目下。

末摘花の巻終

十九号四



